

野菜共通 カブラヤガについて

1 生態

飛騨地域で発生するネキリムシ類はほとんどがカブラヤガである。令和4年および5年に実施したフェロモントラップ調査では、タマナヤガの発生はカブラヤガの3%未満と少なかった。カブラヤガは野菜、イネ科作物、および花卉等広範な作物を加害する。成虫の体長は約20mm、前翅は灰褐色で、中央部に環状、楔形などの地味な斑紋がある。雌成虫は交尾後、雑草や作物の地際部に1~2個ずつ産卵する。1雌あたり約1,000個の卵を産む。卵は25℃で4~5日で孵化する。中齢~成熟幼虫になると体色が濃くなり、土壌と見分けが付きにくくなる。老熟幼虫の体長は約40mmになる。幼虫は約30日の期間を経て蛹になる。蛹期間は2~3週間である。

若齢幼虫は主に茎葉を食害するが摂食量が少ないため実害は少ない。中齢~成熟幼虫になると、昼間は土壌の浅いところに隠れ、夜間に地上に出て活動し、株の地際部を噛み切ったり生長点を食害するため被害が大きくなる。また刺激を受けると、丸くなって動かなくなり、敵から身を守る。5齢幼虫は摂食量が多くなる。1晩のうちに数株を切断するようになり、発生量の割に被害は大きい。



図1 成虫（体長約20mm）



図2 蛹（体長約20mm）

2 発生状況

飛騨地域では老熟幼虫が土壌中で越冬し、成虫の発生は春、初夏および秋に3回のピークがある。発生量は春が最も多く、徐々に少なくなる。成虫の発生は標高が低い地域ほど多い傾向がある。越冬した幼虫が4~5月に羽化し、第1回成虫となる。幼虫は年間2~4回発生する。特に休耕地や前作が野菜であった所で被害が出やすい。

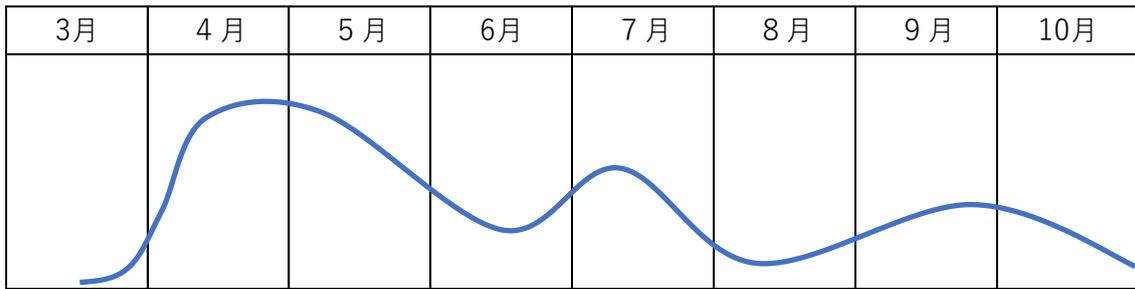


図3 カブラヤガ発生消長（飛驒地域）

3 防除対策

(1) 育苗期

本虫は土中に深く潜り越冬するため耐寒性が強く、一般的な雑草の株元に多く生息していることから、ほ場には恒常的な飛来がある。このため育苗ハウスには侵入防止効果がある4mm以下の目合の防虫ネットを使用する。

(2) 本ぼ

定植時の粒剤や食餌誘殺剤の使用が有効である。施設栽培では4mm目合の防虫ネットが成虫の飛来を防ぐ物理的防除法として効果的である。また露地栽培でも同様に、粒剤や食餌誘殺剤の使用が効果的である。